

廣津和郎全集

十八卷

廣津和郎全集

才八卷

広津和郎全集 第八卷

定価四二〇〇円

昭和四十九年二月一日印刷
昭和四十九年二月十日発行

著者 広津和郎

発行者 高梨茂

印刷者 山元正宜

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋二―一
電話（五六一）五九二一

振替東京三四

広津和郎全集
第八卷

目次

十二月の創作	一五
ペンと鉛筆	二四
正月の創作	三六
トルストイとツルゲエネフの決闘	四二
思想の誘惑	四三
愚劣な吉右衛門論	四四
無責任なる創作批評	四五
誘惑との戦い	四七
自己感心の恐ろしさ	四九
ペンと鉛筆	五二

眉に八の字の文芸

光用穆氏の「人魚」

N——君に

個性と独創

トルストイの写真

思想の変化

相馬御風氏の『還元録』を評す

魂の戸まどい

舟木君に

チエエホフの強み

大家の無理解

「サーニン」の作者

三

五

五

五

五

五

五

五

七

七

七

九

批評家の態度

八

六月の文壇

三

芸術家時代と宗教家時代

九

武者小路氏の「燃えさる火」

三

人道主義の定義

六

十一月文壇

九

個性以上の物

二〇

生田、武者小路両氏に

二〇

トルストイとチエーホフ

二六

「大家」と「新進作家」の傾向
の際立った創作壇

一六

正宗白鳥小論

二五

彼等は常に存在す	一五
怒れるトルストイ	一四
鎌倉から	一三
存在と説明	一六
読んだ儘の印象を	一七
生の論理・死の論理（アルツイバアシェフ論）	一八
自由と責任とについての考察	二〇
三井甲之氏の態度を評す	二七
それは我等の問題だ （如何なる点から杜翁を見るか）	二二
谷崎精二君と「離合」	三三
岩野泡鳴氏に与う	三五

蚤と鶏

二九

女流作家について感想

二三

江馬修氏の「暗礁」を読む

二五

性格破産者のために

二〇

武者小路氏の「処女性」

二四

新年の創作を評す

二五

相馬泰三氏の「荆棘の路」

二九

再び「荆棘の路」の作者に

三一

武郎氏の手紙と実篤氏

二六

二葉亭のリアリズム

二九

「田園の憂鬱」の作者

二六

四、五の作家に就て

二七

或る批評家達に与う	二七
読んだものから	二八
志賀直哉論	二九
文芸時評	三〇
「蔵の中」を読む	三一
『世の中へ』を読む	三二
園池公致氏の「二人角力」	三三
菊池寛氏に答う	三四
私に与えられた公開状を読んで	三五
鎌倉より	三六
江口渙君に	三七
「言葉」について一寸菊池氏に	三八

新春文壇の印象

三七

「おせい」其の他

三〇

鎌倉より

三九

読んだままに

三六

二、三の作家について

三三

舟木重信論

三二

六月の創作評

三〇

二葉亭を想う

二八

「説明」と「描写」

二九

ブルジョア文学論

二二

有島武郎氏に与う

二五

有島武郎の心中

四三

非難と弁護

四〇六

久米正雄の成長

四一四

五月の創作を読む

四二五

散文芸術の位置

四三三

新感覚主義に就て

四三八

再び散文芸術の位置について

四四六

「劇場」を読んで

四五四

先輩諸氏の精進

四五〇

ペンと鉛筆

四五六

ペンと鉛筆

四七一

作品読んだまゝ

四七四

「愛慾」と「人を殺したが……」

四七九

志賀君に、その他

四八五

「白霧」その他

四八八

読んだまゝ

四九七

沖繩青年同盟よりの抗議書

五〇九

文芸上の論戦に就て

五一八

二つの気質

五二六

小説の主客問題、其他

五三三

あとがき

評論

一

